

「アフター・コロナの21世紀社会—14世紀の黒死病の教訓」

2020年9月27日

法政大学法学部教授

水野和夫

人間のやっていることおよび精神構造は、今も昔も大して変わらない。14世紀のペストはヨーロッパでは全人口の二分の一、ないし三分の一の人が亡くなり「これぞ世の終わり」と恐れられた。当時イタリアが世界の中心で、感染対策といえばお金持ちは密を避けて郊外に逃げることであった。それができない人には「医学の第一人者であるイタリア人のジェンデイーレ・ダ・フォリーニョは、『腐敗した』空気の解毒剤としてハーブの香りを吸うことを勧めた」(ケリー [2020] p. 48)。21世紀の新型コロナも特効薬やワクチンは開発中で現在のところ三密を避けてマスクを着用するのがせいぜいである。14世紀の黒死病に対する当時の人々の対処法を稚拙だと笑えない。

疫病は人類にとって三大災厄の一つである。あとの二つは戦争と飢餓である。黒死病に見舞われた14世紀のヨーロッパでは、「中世最大にして最も血なまぐさい戦争」(前掲書、p. 138)であるといわれた百年戦争(1337-1453年)が生じていた。戦争は兵士に重いストレスをかけるので、免疫力が落ち、疫病が蔓延しやすい。さらに、当時、飢餓もヨーロッパを襲い、三つの災厄が中世ヨーロッパを襲った。

21世紀の現在、1995年のエイズに始まって次々と未知のウィルスが人類を襲っている。戦争は「テロとのたたかい」となって現れ、経済面では「米中新冷戦」が始まったばかりである。21世紀の気候変動についても、ケリー(2020)のいう「環境ストレスは過去二千年間で最も深刻だった」(前掲書、p. 42)と推測している14世紀初期を凌ぐ可能性がある。本稿では、新型コロナは現在社会にどのような影響を与えるかについて、「長い16世紀」(1450-1650年)という歴史の危機に突入する引き金となった14世紀の黒死病と現在を比較し考察したい。

人類史上3度あったパンデミック

人類史上最初のパンデミック(伝染病の世界的大流行)は6世紀の「ユスティニアヌスの疫病」(ビザンチン帝国に襲来したペストの大流行)、第二波が14世紀の黒死病、そして「19世紀末に中国でふたたび発生したペストの大流行」(ケリー [2020] p. 85)である。第3波は「ヴィクトリア時代の人々を震えあがらせ、今日のビッグ・サイエンス(略)の先駆けをもたらした」(前掲書、p. 85)。そして21世紀は4度目のパンデミックに見舞われている。

生態系の変化が疫病をもたらす。地殻変動により生態系が変化し人間とペスト菌を接近させた可能性が高いからである。6世紀の「ユスティニアヌスの疫病」のとき、ヨーロッパでは536年に「1年半の間太陽が暗かった。一日に4時間しか日が照らず、照ったとしても

光は弱かった。果物は熟さず、ワインは酸っぱいブドウの味がした」(クラーク [2015] p. 22) という。「535 年ごろに環境の激変があったらしいことが明らかになってきた。この年に地球規模で気温が下がり、降雨パターンが変化したのである」(p. 23)。原因は彗星か隕石の衝突、あるいは火山の大噴火があったと推測されている。

中世の黒死病も気候変動と関係している。1357 年 10 月、ペストがイタリア・ジェノバに到着する前の 1315 年にヨーロッパで気候変動の影響で凶作となった。「1315 年には聖書の中の大洪水に匹敵するほどの絶え間ない雨の後で、ヨーロッパ中で農作物が不足で、飢餓(略)、が万人の知るところとなった。(略) 赤痢の伝染が同時代に広がった。地域的な飢餓が 1315~16 年の大飢饉の後で途切れなく繰り返された」(タックマン [2013]、pp. 43-44)。飢餓は 1316 年に終わらず 1320 年にも起き、「地方の貧乏人たちの惨状が、それを始めた羊飼いのせいでパストロと呼ばれた、妙な、ヒステリックな集団運動を引き起した」(前掲書、p. 63) のだった。疫病、戦争、飢餓、それに加えて反乱(一揆)がすべて 14 世紀に集中して起きたのだった。

14 世紀の地球は地殻変動にも見舞われ、気候変動をもたらした。前者は疫病を、後者は飢餓をもたらした。もちろん、当時の人は 14 世紀初めが小氷河期の始まりでそれが 1700 年頃まで続くとは知る由もなかった。「バルト海が 1303 年と 1306~07 年に亘って二度凍った。その後、季節はずれの寒さ、嵐と雨とカスピ海の水位の上昇を伴う年が何年も続いた」(前掲書、p. 43)。

ケリー (2020) によれば、14 世紀のペストは「ことによると、世界中の海で起きていた異常な地震活動がその原因だったのかもしれない。また、旱魃、洪水、地震といった環境の激変がペストを誘発することも経験上わかっている。そのような事情は往々にして、遠隔地にいる野生の齧歯類の群れ、すなわちペスト菌の宿主を生息地から追い出し、餌や棲かのある人里へ追いやるからだ」(前掲書 p. 42)。

1995 年にハーバード大学のジョナサン・マン教授は「エイズこそ恐ろしい新時代の幕開けだと警告し、『この時代を特徴づけるのは新種の病気が続々と登場することだ』と予測した」(ケリー [2020] p. 12)。まさにマン教授の予測が的中した。

不安定化する社会秩序

疫病を広めるのは戦争だけではない。より遠方の地域と交易が始まると、病原菌やウィルスも人について移動する。エイズが大流行した 1995 年はグローバル化が加速した年でもある。6 世紀にはビザンチン帝国はシリア、エジプトとの交易を活発化させ、ペストが大流行した。14 世紀にはイタリアのジェノバやフィレンツェといった都市国家が東方貿易に乗り出し、ペストを持ち帰った。現在はグローバリゼーションで地球の至るところに人が利益機会を求めて進出している。

疫病は人々を不安にさせ、これまでの安定した社会秩序が混沌としてくる。為政者は責任をとらなくなり、庶民に犠牲を強いるようになる。そして、金持ちの柄が悪くなる。こうし

たことは「災厄の14世紀」とそれに続く「長い16世紀」に起きた。ペストが流行した14世紀のなかば、ローマ聖庁のスペイン人官吏アルヴァー・ペラヨは「私はブローカーと聖職者が目の前にいくつもの山と積まれた金を勘定しているのが目に入った」（タックマン[2013]、p. 47）と報告しているように、教会の墮落が目にも余るようになった。

「災厄の14世紀」の意義は未だ姿がみえない近代を準備したことにある。教会は敬意を失うことを承知で蓄財を優先したのだった。ジョン・ウィクリフ（1384-1384）は「教会が悔悛の秘跡を金銭で代償できることを許した瞬間以来、その結果は悪のみであった」（前掲書、p. 527）と糾弾した。彼の功績は「救済を教会の仲介から個人に移した。（略）ここに現代社会の出発点があった」（前掲書、p. 573）という点にある。こう考えれば、「長い16世紀」は黒死病に始まり、ホップズの『リバイアサン』（1651年）で終わることになる。「長い16世紀」は3世紀にわたる「歴史の危機」だったのである。

危機が長期化すると、社会が分断される。その分断を克服できなかった結果、「長い16世紀」は結局、宗教の時代と帝国の時代を終わらせた。フェルナン・ブローデル（1902-1985年）によれば、「長い16世紀」が近代の扉を開けたのは、「深い溝」を埋められなかったからである。1550年から1600年にかけて「いかなる疑いの余地もなく、すべては二極化する傾向がある。つまり広大な土地に支えられた強力な名門として再建される、豊かで、たくましい貴族階級と、ますます数が多くなる貧乏人、極貧者、（略）とに二極化する。（深い割れ目）から古くある社会を二つに分け、そこに深い溝を掘る」（ブローデル[2004]p. 166-167）、そして「この溝を埋めるものは何もない。（略）世紀末のカトリックの驚くべき慈善さえも、溝を埋めることにはならない」（前掲書、p. 167）と結論づける。

そして、「17世紀にはこの悲劇の治りようのない傷口が白日のもとに広げられる。社会も国家も、文明も社会も、何もかも、徐々に、悪に襲われる。このような危機は人々の生活に危機の様相を与える。金持ちが柄が悪くなり、（略）一方には召使があり余るほどいる貴族の家、他方には、（略）闇市、盗み、放蕩、冒険、そして特に極貧の世界……がある」（前掲書、p. 167）という。しかも悪いことに、海賊行為は都市や国家が背後で支援しているし、山賊行為の背後には封建領主が控えている。

21世紀は9・11で幕があいた。そして2016年には米国で分断をあおるトランプ大統領が誕生し、ヨーロッパでイギリスがEUからの離脱を決めた。日本でも2017年7月に安倍総理大臣が東京都議会選挙の応援演説で「こんな人たちに負けるわけにはいかない」と発言し、国民を敵と味方に分断した。「長い16世紀」を反面教師とし、政治家は国民の融和を目指すことが必要である。そうでなければ、新型コロナウイルス感染症対策を理由にセキュリティが強化された監視社会になり、民主主義社会が崩壊しかねないのである。

「ペストにかかった動物たち」（ラ・フォンテーヌの『寓話』）

災厄に襲われると人間は生贄を要求する。17世紀のラ・フォンテーヌ（1621-1695年）は、責任は下にいくほど重くなるという当時の風潮を1668年に著した『寓話』のなかの「ペス

トにかかった動物たち」で次のように指摘している。

すなわち、「恐怖をまきちらす病気、(略) 一日で地獄を過密にすることもできるペスト(略) が動物たちを攻め立てている」(p. 18) なかで動物界のトップに君臨するライオンが会議を招集した。そして次のように言った。「われらのなかでいちばん罪ふかい者がその身を犠牲にして天の怒りの矢をうけるがよい」といい、ヒツジをむさぼったなどとまずは自らの非を告白し、「わしはこの身を捧げよう、必要あらば。だが、わしは思う。(略) 完全な正義に従って、もっとも罪ふかい者が死ぬことになるのが望ましいゆえ」といった。すると、その家臣であるキツネが「陛下」と手をあげ、「ヒツジども、しがない奴ら」なので陛下には罪がないと擁護する。

すると、忖度したトラ、クマたちが拍手喝采し、次々と自ら犯した罪を告白したが、「あまり深く追求しようとする者はいなかった」。ところが、迂闊にも最後にロバは通常ならなんでもないようなことを次のように告白した。「坊さまたちの所有地の牧場を通りかかって、(略) 牧場の草を食べってしまった」といったとたんに、他の動物たちが「他人の草を食うとは！なんと忌まわしい犯罪！」と一斉に非難し、結局ロバは絞首刑に処された。

世の中が非常事態、すなわち「歴史の危機」になると、ラ・フォンテーヌ(1972) がいうように「あなたがえらい人か、それともみじめな人間かによって、法廷の判決はあなたを白にするか黒にすることだろう」(p. 22) となってお金があれば邪を正にできるという社会になって正義が通用しなくなる。

三世紀半たった現在、技術は格段に進歩したが、残念なことに人間の精神は進歩しているとは到底言えない。日本も例外ではない。ネット上で「上級国民」という言葉が溢れているし、政府は不都合な記録は存在しないとの一点張りである。そうであれば、アウグスティヌスが西ローマ崩壊の危機に直面し社会秩序が崩壊したとき、413-426年にかけて著した『神の国』で「正義がなければ、王国も盗賊団と異なるところはない」と指摘したことについて、いまだに人類は答えを見出していないことになる。

新型コロナが21世紀の世界に問うているのは、感染対策か経済か二者のうちどちらを優先するかではなく、どんな社会を構築するのかである。これまでの社会は「より速く、より遠く、より合理的に」だった。「より遠く」がグローバリゼーションによって人間と動物の住む境界線が曖昧となり、本来ネズミなどの間で止まっていた菌やウイルスが人間を襲う。「より速く」を目指す行動が化石燃料を大量に消費しCO₂を排出し、気候変動を招いている。企業の「より合理的に」が人件費を削減し、人々の生活にゆとりをなくし、富者と貧しい人の中で対立が激化する。これまでの行動を改めない限り、次々と新たな感染症が襲って、経済も大打撃を受け、二者を失う。21世紀は「より近く、よりゆっくり、より寛容に」の行動原理の上になりたつ社会を構築する必要がある。

以上

(参考文献)

- ジョン・ケリー (2020) 『黒死病 ペストの中世史』 原著 2005 年、野中邦子訳、中央公論新社
- バーバラ・W・タックマン (2013) 『遠い鏡 災厄の 14 世紀ヨーロッパ』 原著 1978 年、徳永
守儀訳、朝日出版社
- ジリアン・クラーク (2015) 『古代末期のローマ帝国』 原著 2011 年、足立広明訳、白水社
- フェルナン・ブローデル (2004) 『地中海〈普及場〉 III 集団の運命と全体の動き 2』 原著
1966 年、浜名優美訳、藤原書店
- ラ・フォンテーヌ (1972) 『寓話 下』 原著 1678-79, 1693 年、今野一雄訳、岩波文庫
- アウグスティヌス (1982) 『神の国』 原著 413-426 年、服部英次郎訳、岩波文庫